



論 説

## 地図史料学小考

鈴木純子

## 1. はじめに

足かけ2年になるが、1992年の11月（東京）・12月（大阪）に、「地図の世界—地図の史料学とはじめ」と題するシンポジウム（日本国際地図学会設立30周年記念）<sup>1)</sup>が、海外からの参加者も得て開催された。地図の史料学と間に「の」を介在させた控えめな表現ではあるが、地図史料学という用語の公の場への初登場ともいえるべきものである。

これを受ける形で、日本国際地図学会の専門部会の一つである地図史専門部会は、昨1993年1月、その内部に①古地図、②旧版地形図類、③旧版水路図・図誌類、④地図史料の4分科会を設置し、あらためてそれぞれのテーマにそった活動を展開しようとしている。①はやや漠然とした表現ながら、以下③までは、対象による区分となっており、これまでの部会活動の部門別細区分ともいえるべきものとなっているが、第4分科会のテーマ「地図史料」は、これらとやや趣が異なり、対象資料の区分にとらわれず、史料としての地図の機能や可能性、地図の利用の態様の検討とともに、現にある地図の有効利用のための組織化、地図研究のための文献調査、既存史料の後世への伝承等、未確定ながら、理論的側面も含む壮大、逆に言えば茫洋とした設定となっている。

たまたま筆者は、さきのシンポジウムにも関係し、地図の組織化（整理）、保存などに関わりの深い図書館を職場としていることもあって、上記の分科会の世話役をつとめ、例会を中心とする活動にとりかかったところであるが、何分にも呱呱の声をあげたばかりのニューフェースであり、その運営には、足場がいささか心もとないというのが実情である。しかしながら、「地図史料学」なるものの登場は必ずしも唐突なものではなく、それなりに機も熟して来ていることのあらわれと見ることもできるのではないだろうか。論考というよりは探索の手控ええといったスタンスになると思われるが、地図史研究や史料学などとの関わりの中で

地図史料学の基盤を探り、その枠組みの検討への一試案にでもなればと考える。

## 2. 地図史研究の動向——変遷と現況

伝統的な地図学は、地図の作成ということを経験として、ルネッサンス以降のヨーロッパで育まれてきた。作成技術の上では数学（測量・投影法）・天文（測地）学・印刷術・写真・精密機械等、また新しくは電子工学等とも関わり、表現内容の上では地理学、具体的な成果において芸術とも関わりながら、全体としては自然科学ないし工学の色彩の強い分野として発展してきたわけだが、1960年代以降、その研究の視野が著しく拡大してきている。作成面での電子技術の導入とその飛躍的発展はもちろんであるが、作成面だけでなく、事物、概念、状態、過程、現象などを場所との関係で認識することを助けるグラフィックな媒体<sup>2)</sup>（Harley, 1987）としての地図の機能を、コミュニケーション理論や記号論等も援用しながら、多角的に解明しようとする方向が新しく登場し、活発な議論が展開されるようになったのが際立った特色と言える。地図学のこうした変化は、地図史研究の上にも色濃く反映している、というよりこれらは全く同じ現象と捉えるべきなのであろう。従って、地図史研究の動向をとらえるには、地図学の理論的側面に関する検討の動向にも目を配る必要があるだろう。

欧米における地図史研究の歴史的展望として手もとにある文献は、Skelton（1972）、Harley（1987）、Wallis（1989）、川村（1992）、長谷川（1991）、海野（1993）がある。流れの概要については、これらの文献に頼らざるを得ない部分が多いが、地図史の研究がどのような課題意識や枠組みの中で進められてきたかを中心に置きながら自分なりにおさえてみたい。

Harley（1987）は地域差を保留した上で、欧米における地図史研究の年代区分として、①ルネッ

サンスから1800年頃まで、②19世紀から1930年頃まで、③1930年以降、の三つを示しているが、1930年から現在までにすでに50年以上が経過しており、その間の変化の大きさを考えると、③の時期については、1960年頃と80年頃の2段階程度の細区分を設けるのが適切であると思われる。

①は言うならば地図についての知的探究の発生期である。新しい発見により次々と書きかえられる地図が、過去のモニュメントとしての地図——同時代の地図に対する「古」地図——という観点につながり、独自の文献群としての地図に対する関心が、次第にその研究や収集へと展開していく段階といえよう。

Ptolemaeusの地図を例とすれば、復元され出版された15世紀から16世紀にかけての頃には、入手できる殆ど唯一の、正しい世界図として迎えられたものであろうが(地図の図版を含む*Geographia*の初版は1477年, Bologna), 拡大する世界像との関係で次第に新時代の地図とは別の歴史的な作品と見られるようになる。Strassburg版(1513)は、旧来の図と新增補の図を別セクションに明確に分けて載せた最初のものである。またMercatorは1578年に、逆に新図の増補をしないPtolemaeus図を、歴史的見地からいわば複製版として刊行し、この地図への観点の変化を示している(Skelton, 1972)。

よく知られたPeutinger<sup>3)</sup>によるローマ時代の道路図の複製や、Richard Gough<sup>4)</sup>の*British Topography*におけるイギリス中世の地図の比較研究、Gough自身、同じくイギリスのCotton卿らの地図コレクションなどもこの時代に成立している。

②は、近代科学全般の形成期でもあり、地理上の発見、探検の成果を映す歴史的記録物としての古地図への関心が高まり、地図史の研究が、なお歴史地理学の補助分野という位置づけながら、当代の地図学とは区別されたものとして成立していく時期といえることができる。

なかでも後半の部分は研究史上における形成期という色彩が強い。

地図作成史の上でも、18世紀後半から19世紀にかけては、フランス、イギリス等をはじめとして三角測量に基づく国家規模の地図作成事業も緒につき、官・民いずれの面においても近代的な地図作成が軌道に乗ろうとしている時期である。地図

作成に関わる科学ないし技術の発展も、当然これに伴っているはずであるが、同様の成長期にある古地図研究は、興りつつある地図学ではなく、地理学に強く依拠して成果をあげてきたという面が指摘できる。その理由としては一つには、数学(測量・投影法など)・天文学・航海術・地理学・印刷術等、広範な分野に関係をもち、ひとつの学問としての姿が見えてこない地図学よりは、一定の社会的認知を獲得している地理学のほうにその支持基盤たる力があつたこと、一つには、上で敢えて地図史研究といわず、古地図研究といったように、地図史研究の中心は、過去の景観や地理的知識の拡大・発展を映す鏡としての古地図研究にあつて、もともと歴史地理学ないしはその補助学と考えられるものであつたことがあげられよう。

パリ(1821)をはじめ、ベルリン(1828)、ロンドン(1830)に続く各地に相次いで成立した地理学協会等の研究・交流団体、これらを基礎とする国際地理学連合(第1回アントワープ大会、1871)が、そのメインテーマとしてではないにしても、古地図研究にも恒常的な研究者間のコミュニケーションの場を提供し、さらにこれまた、フランス、イギリスなどが先鞭をつけた地図図書館の成立・発展や、古地図集成のファクシミリ出版による資料へのアクセスの拡大、また、コレクターの増加などがこの時代の研究史の背景となっている。

古地図集成の出版は、パリ在住のポルトガル貴族Santarem子爵2世<sup>5)</sup>や、フランス国立図書館の地図部長Jomard<sup>6)</sup>によるものをさきがけに、早期の地図の見本として、また歴史的記録物として、なかでもアメリカ大陸の新知見に関わって、1900年以前にすでに数多く行われている。Kunstmann, F.の*Atlas Entdeckungsgeschichte Amerikas*(München, 1859)、Kretschmer, K.の*Die Entdeckung Amerikas*(Berlin, 1892)、A. E. Nordenskiöldの*Facsimile Atlas to the Early History of Cartography*(Stockholm, 1889)、*Periplus*(Stockholm, 1892)等々、こうした出版は今世紀にもひきつがれ、日本島に関するP. G. Telekiの*Atlas zur Geschichte der japanischen Inseln*(Budapest, 1909)、F. C. WiederがエジプトのKamal王子のもとで編纂した最大規模の*Monumenta cartographica Africae et Aegypti*な

ど枚挙にいとまがない。こうした出版は多大の費用と労力を必要とし、時には国家的事業ともなるが、収録図についての時間をかけた細部の検討や相互の比較研究の機会を拡大するばかりでなく、資料の所在を知る手がかりとしても有用なものとなった。

国際地理学連合も1908年のジュネーブ大会以来、委員会(Commission on Early Maps)を設けてファクシミリ編纂を計画したものの、結局実現を見ぬまま、1964年ロンドン大会でその終結がきめられ、かわってWorking Group on Early Mapsにより、現存の中世世界図の総合的な目録編纂の企画<sup>7)</sup>が進められている(Wallis, 1989)。

地図図書館は、大英博物館におけるCotton卿コレクションのように、より早期に成立したコレクションや新しく発見された地図の集積センターとしてこれを保存し、利用の機会を提供するだけでなく、目録や書誌の編纂の面で地図史研究に寄与するところが大きい。一機関の所蔵目録に限らず、地図の形態・形式・年代・地域、また、それらの組み合わせなどさまざまな観点による目録や書誌が可能、また必要であり、これらの編纂活動自体が地図史研究の重要な分野ともなっている。研究者の多くはその研究の素材を図書館にもとめ、有力な図書館の司書がこれらの活動に関与しながら研究の業績をあげているケースも多い。

この時期に多く行われた研究テーマを展望してSkelton(1972)は、中世の世界図とそのローマ時代の起源・地図の数理的構成や投影法の変遷・地域的測量図の発達・地理的知見の拡大と地図の変化・航海術の発展と海図・地図のデザインや記号・印刷術等を列挙している。

成熟期ともいべき③の時代への転換のキーパーソン、Leo Bagrow<sup>8)</sup>の早期の報告*Istoriya geograficheskoy karty: Ocherk i ukazatel' literatury*(The history of geographical maps: Review and survey of literature, Petrograd, 1918)には地図史関係文献1,881タイトルが収録されているという(Harley, 1987)。

1935年にはBagrowが、地図史研究の年鑑として、*Imago Mundi*を創刊している。同誌は彼の死去(1957)まで、計13巻が刊行され、以後、非営利のImago Mundi Ltd.により現在まで継続刊行されている。本誌は地図史の専門誌として優れた

研究報告を載せることはもちろん、国際的な視野による年間の関連文献のリスト、展示会や学会の記録など、充実したクロニクルも含んで、地図史研究のコアとなっている。また、大戦の影響で実際の刊行は遅れた(Berlin, 1951)ものの、地図史に関する最初の本格的な書物、同じBagrowの*Die Geschichte der Kartographie*の刊行が1943年に予定されるなど、この時期はまさに一つの転換期といえることができる。このあたりを③の成熟期の始まりと考えるが、その細分に想定した1960年頃までの間に、第2次世界大戦の終了という転機をもう一つ考えるほうがあるいはよいかもしい。

大戦中の大量の地図需要と作成、ついで戦後の復興や開発のための地図の活用などに呼応する技術的発展は、必然的に、地理学の軒先を一步離れた「地図学」の発展を促し、また、作成された大量の地図類がその最終的な保管場所として図書館に集められるようになったこともあって、地図図書館が飛躍的な発展を見せるなど、地図史研究の諸条件の整備は戦後急速に進んでいる。

地図学が地図史にもたらした刺激は、ひとつには拠り所となる学会の成立、もうひとつは、新しいアイデンティティーをもとめる地図学自体の方法論的検討である。

1950年代後半に行われた、応用地図に関する国際会議等が契機となり、国際地図学協会(International Cartographic Association=ICA)が結成される。経済復興や地域計画に関連する多様な主題図をめぐる問題意識や、電子技術の応用による地図作成自動化への期待などを背景に、従来からの地図作成に関する技術の研究・開発に加えて、これらの地図の社会的な立脚点をさぐる、すなわち地図の成り立ちや機能など理論的な側面についての研究の必要性が意識されるようになってきた時期である。地図を地図そのものとして研究の対象に据えることは、地図学のもっとも基本的な立場であり、いまさらの観もあろうが、Eckert<sup>9)</sup>などの先駆的な研究を除けば、そうした考え方が一般化してきたのはやっこの頃のことといえる。

ICA設立総会は1959年5月、13か国の参加のもとにベルンで開かれている。発足間もないICAは国際地理学連合(International Geographical Union=IGU)と緊密な関係を保ち、1964年から

総会の同時・同地域開催を続けてきたが、1980年東京大会を最後として独自の開催へと変わっている。ちなみに日本は1961年の第一回総会から加盟しているが、1962年に結成された日本国際地図学会が、以来国内の連絡団体をつとめている。地域ないし国別の地図学関係の学術団体としては、早く1908年にストックホルムで結成された“Kartografiska Sällskapet”があり、1922年には機関誌*Globen*も創刊されたというが、さきの地理学協会の場合のような各地における類似機関の創設ブームは見られず、戦前ではわずかにドイツ、オーストリアに留まった。1960年前後からは新設が相次ぎ、1972年には学・協会26、専門誌43を教え、1980年には67誌を見るに至っている (Harley, 1987)。

地図史に関しては、各地の地図学会、機関誌、会合などが、発表や交流の場を提供しているのももちろんであるが、ICAにおいても、1972年にWorking Group in the History of Cartographyが誕生し、これが次の総会(1976)でCommissionになり、さらに1985年には四つのStanding Commissionの一つとしてStanding Commission on the History of Cartographyが成立して現在に至っている。別に1964年のIGUロンドン大会における会合を先駆として、1967年から一年おきに開かれる地図史独自の国際的な学会<sup>10</sup>がある。運営はホスト国一任の形だが、1971年にはオーガナイザーとして、*Imago Mundi*の購読者をメンバーとするSociety for the History of Cartographyが設立され、ゆるやかな組織的基盤をなしている (Wallis, 1989)。

### 3. 地図学・地図史の新展開

第2次世界大戦から1970年代にかけては、空中写真測量や電子技術など目ざましい技術革新によって、地図作成の材料として集められるデータの量が激増し、地図としての表現の能力を大きく上回るまでになったこと、経済復興や地域開発など多様化する地図需要にあわせての主題図の発達、地図使用人口の増加などの条件が背景となり、正確・精密な地図の作成を最大の目標としてきた地図学の分野に、改めて地図には何をどう表現したらよいのか、地図の意味とは?という問いを芽生えさせることになった。

改定を重ねながら現在も地図学の教科書として広く用いられている*Elements of cartography*の著者R. H. Robinsonは、早くも1952年の*The look of maps*で、地図の作成目的を達成するためのデータの選択や表現への配慮の必要性にふれ、「地図作成のゴールは正しい情報を示す地図を作るだけでなく、図学的に正しい地図、いいかえれば“正しい視覚的印象”を作り出すことである」として、地図学の伝統的な主人公であった地図作成者だけでなく、“視覚的印象”を得るべき地図使用者の存在に注意を喚起し、地図が両者間の情報伝達手段であることを指摘しているという (金窪, 1991)。

地図をコミュニケーションの手段と位置づけ、伝達のために求められることを実際にどんな風に行うかという問題提起は、1960~70年代にかけて多くの研究者の関心を集め、記号論や情報理論なども援用して活発な議論が展開されている。

現実世界を物理的に映す鏡としてではなく、伝達の目的を達成するための工夫や作業の結果作りあげられた製品としての地図そのもの(その作成と目的達成にいたるプロセス)が主要テーマとなり、地図学の理論分野がこれをめぐって活気を見せはじめたことは、地図史研究にも新しい視野を開くものとなった。古地図の研究は従来そこに盛り込まれている内容に研究の中心があったが、形態の研究もこれに劣らず不可欠であるとするSkeltonの指摘に古地図研究の観点の変化を読みとることもできよう。形態とは投影法やグリッドなどの数理的要素・縮尺・精度・デザイン・表現技法と記号・文字・装飾図案・手書きと印刷の別・彫版法・版の状態等で、その研究が重要なわけは、これらによって地図がそのコミュニケーションを行うからであるとする (Skelton, 1972)。

1967年にロンドンで開催された地図史会議のテーマは「歴史史料としての古地図」となっており、成果品としての地図とその生成のプロセス、コミュニケーションの立場からの古地図研究、“map”や“cartography”の意味等への課題意識の芽生えが見られるものであったとHarley (1987)は指摘している。

このような地図自体を対象とする地図史研究の方向は、地図史研究が地図学の観点で、また、地図学のバックグラウンドを持つものの手で進めら

れるようになってきたこととも関連しているものと思われる。ようやく学問の一つの分野として動き始めた地図学からの人材補給が少しづつ行われるようになってきたということでもあろうか。

地図史における地図の形態的側面の研究の必要に言及したSkelton (1906-1970) は、同時に、こうした研究のためには数多くの地図を参照することが必須であるにもかかわらず、その条件は未だ整備されていないとして、個々の地図についての形態的側面をもカバーする記述法の標準化、各種の地図収蔵機関の所蔵目録や、統合的、あるいは地域・時代・主題・様式などさまざまな観点による書誌・目録の整備等が重要であることを強調している。大英博物館地図室（現英国図書館地図図書館）長であったこの人ならではの「地図史料学」の核心にふれる発言である。

1980年に刊行されたHarveyの*The history of topographical maps*<sup>11)</sup>は、従来の「地図発達史」ではとりあげられることの少なかった地形図（大縮尺図）の歴史を、その作成法に着目して考察しており、シンボル、絵図から測量図へという地形図の進化の考え方には異論も多いが、1960-70年代の地図史研究の変化を示す典型として少なからぬ反響を得たものであった。

1970年代後半になると、地図史の研究動向に、美術史の分野の図像学・図像解釈学、言語学の分野の記号論、社会史・生活史重視の歴史認識の風潮等の影響が見え始める。

Blakemore and Harley (1980) は、タイトルの示すとおり方法論で、従来の地図史研究に支配的な「地図史＝地図発達史と見る進化論的」「より古い時代の装飾的な地図に重きを置く骨董趣味的」「西欧先進国とその版図拡大に偏る国家主義的」の三つのパラダイムへの疑問を提起した上で、新しい地図史研究の枠組みとして、伝記研究とその資料の充実、地図書誌<sup>12)</sup>作成の促進とその方法論の確立、地図作成の技術とプロセス及び地図の精度（測地・測量・景観の表現など）の研究、図像としての地図の意味の解釈等を示し、最後に地図を一種の言語と見なす考え方を採用して、これが地図史研究の土台であり、これによって広範な学問領域にわたる上記の作業の統合が可能であるとしている。そして地図史について「空間的情報を伝達するための表現様式全般の歴史」

と定義し、その対象として地図の性質・構造・普及・過去の社会における地図言語の重要性をあげて、地図がもつ空間情報の表現力が社会的な空間認識に果たしてきた役割への注目を喚起している。

地図史を数々の技術的發展や新しい着想による進歩の歴史と見て、最古・最新・革新・画期的・革命・「離陸」や、精密さ・縮尺・投影法・デザインなどを向上させたすぐれたカルトグラファーの業績を中心に進められてきた従来の地図史研究 (Harley, 1989) の方法はもとより一概に否定されるべきものではないが、BlakemoreやHarleyの考え方に代表されるような別の観点が加わって、研究の可能性は一段と拡大したといえるだろう。

既にふれたとおり、1985年にはICA内での地図史にかかわる組織はStanding Commissionに昇格し、グループ成立以来のプロジェクトであった*Cartographic innovations: An international handbook of mapping terms to 1900*<sup>13)</sup>が刊行されるなど、国際的な活動の成果もあがってきている。コミッションはほかにもいくつかの作業計画<sup>14)</sup>を進めている。

J. B. HarleyとD. Woodwardの共編の、時間的・空間的ダーウィニズムや骨董品の地図観を超えた地図史の集大成 (Harley, J. B. and Woodward, D, 1987-) が、全世界の一線級の研究者を動員して進められている（全6巻〈ただし第2巻アジアは2分冊〉既刊2冊、第1巻は本稿で多く引用している）ことなどにも、現代の地図史研究の活況をうかがうことができる。

現在の地図史研究の枠組み、あるいは位置づけを、これまでの研究史の中で理解したいと考え、文献によりながら英米を中心とする流れを追ってみた。いささか冗長とも見えるが、周辺諸学とも関連しながら、ダイナミックな進展を続ける研究の表面の僅かな泡をすくいとったに過ぎないようである。英米中心は学会の趨勢に見合うものともいえるが、語学的制約も白状せざるを得ない。いずれ補強・補正が必要であろう。

#### 4. 日本における古地図研究

先駆的人物として、江戸時代後期に幕府書物奉行をつとめた近藤守重 (1771-1829)、明治初期、創設当初の内務省地理局で地誌編纂事業に携わっ

た河田巖（1920没）がいる（海野，1993）。いずれも時の政府の地誌的資料を取り扱う位置にあった人物であり、古地図に対する共通する課題意識のようなものを類推することもできそうである。

市井にも古地図への興味があったらしいことは、現存最古の刊行江戸図と目される「武州豊島郡江戸庄図」（寛永九年開板）が江戸時代のうちにすでに復刻図として刊行されている<sup>19</sup>ことや、歴史地理的な興味からであろうか、開田図や難波、江戸、平安京などのいわゆる古図の夥しい写図が残存していることからもうかがうことができる。

昭和前期には、芦田伊人（1877-1960）・藤田元春（1897-1958）・栗田元次（1890-1955）・秋岡武次郎（1895-1975）・岡本良知（1900-1972）・中村拓（1891-1974）・鮎沢信太郎（1908-1964）等により、地図史に関するまとまった著書が相次いで発表されている（海野，1993）。この時期は欧米の研究史における③の時期とほぼ平行している。

藤田（1942）は「地理学史」となっているが、自序に「地理学の所産として、地誌と同時に目離すことのできないものに、我地図があり、図籍がある」と記すとおり、地理的知識の集約としての地図を重視し、記述の大部分が地図にかかっている。別個に発表された論考をとりまとめて通史的に配してあり、朝鮮や中国、また西洋と日本の地図（地誌）のかかわり方、仏教の世界図を介しての地図と世界観への言及、「プロゼクションに合した地図でない」道中図等にも目を配る包容力、地図上の記号への言及など、地図そのものに則した現代的着眼点が随所に見受けられる。栗田は江戸時代の刊行図、岡本・中村は近世初期の東西の地図のかかわり、また鮎沢は江戸時代の世界図などそれぞれのテーマを深めている。「日本地図史」・「日本地図作成史」・「世界地図作成史」は秋岡の成果の集大成となっている。秋岡の日本及び世界「地図作成史」2編は同氏コレクションの古地図集成の解説編であるが、ほかにも「日本の古地図」（創元社，1969）・「日本古地図大成」（講談社，1972）・「日本古地図大成世界編」（講談社，1975）などの古地図集成が出版されており、室賀信夫（1907-1982）・織田武雄・海野一隆らによる優れた解説が見える。

戦前期を中心とする前段にひきつづき、日本では、日本人の地理的知識や世界観の形成に影響を与えた中国や朝鮮、また、イエズス会やオランダを通じてのヨーロッパとの交流などの探究が地図史研究のテーマとして大きなウェイトを占めているのが一つの特色といえる。海野一隆・船越昭生・高橋正等々、この分野での優れて緻密な論考が多い。知・見の伝播を実証的に跡づけることを目的として、現存の史料（地図）を相互に広く比較検討し、伝写の系統・類縁関係の系譜・受容の状況などを明らかにしようとする試みが、史料の発掘や見直し、またその取扱いの方法の確立に大きく貢献している。

研究の主要なテーマとしてはほかに、京都・大阪・江戸の三都の絵図をはじめ各地の城下絵図、官撰の国絵図や諸藩の測量・絵図調製事業、荘園絵図、地籍図等々があり、それぞれの残存状況や作成の方法・プロセスなどについての研究成果の蓄積が進んでいる。例えば、矢守（1974，1975）は城下絵図史への着眼点について具体的に述べている。

また、京都大学地理学専攻院生によって始められた葛川絵図研究会（1981- ）の活動<sup>20</sup>も、近年の特徴的な動きとして注目される。その名のとおり、葛川絵図（京都北方安曇川谷の天台修験道場葛川明王院に残る鎌倉末期作成の古絵図、京都国立博物館寄託）を素材として、絵図に盛りこまれた自然・人文の諸事象、同時代の世界像（地域像）のモデルに迫ろうとする共同の研究活動を端緒として、以後各人の関心に合わせた古今東西のさまざまな地図についての研究交流のグループとなっている。欧米の近年の研究動向の反映が見られ、多くの若手研究者が名を連ねている。人文地理学会・歴史地理学会等を通じてご存じの方も多いただろう。メンバーの比較的近年の成果をまとめた『絵図のコスモロジー』の編集委員は、小川都弘・小林致広・下坂守・長谷川孝治・久武哲也・吉田敏弘の諸氏となっている。

古代歴史地理学の成果として蓄積されてきた景観復原図を体系化し、地理学の基本的対象である居住の場の普遍的な意味を掘り起こす過程で、これらの地図（復原図）が表現している古代の人々のメッセージを読み解くための記号論的アプローチの可能性を提示した千田楨（1980）や、アメリ

カ先住民族が自らの空間認識を平面座標系の地図（岩絵・砂絵）へと変換する過程の解明を通じて地図的表現の意味を探ろうとする久武哲也（1982ほか）等がこれらの活動の先行をなしている。

近代以降の官製地図（地形図・海図など）を中心とした作成史の研究や周辺史料の探索が進んでいることは、日本の地図史研究のいまひとつの特色といえるだろう。外国からの技術導入により急速な近代化を見る地図作成事業の進行と、それを可能にする近世日本の潜在能力、国策と地図整備の関係など興味深い分野である。

組織についていえば、地図史を看板とする学会はこれまでのところ日本にはない。日本国際地図学会に地図史専門部会があり、機関誌「地図」にも地図史関係の論考はしばしば見られるが、これらが日本における地図史研究の中心的存在には必ずしもなっておらず、地図史に関する重要な論考の多くは大学の紀要類や史学・地理学・科学史・洋学史等の雑誌・論集などに散在している。

なお、洋の東西を問わず、古地図に関してはコレクターの研究への寄与がひとつの特色となっているが、日本には現在、コレクター・学者・その他もろもろの古地図愛好者による、地図資料協会があり、小冊ながら月刊の「月刊古地図研究」が、通号288号に達している。

## 5. 史料学と史料としての地図

「歴史家が過去を再構成するに当たっては、史料によってその証拠を明らかにしなければならない。一般に歴史認識のもととなるべき素材を史料というが、歴史研究の基礎であるこの史料について、いかなる素材が史料となりうるかを検討し、その固有の性格を究明し、収集、分類の方法を探究するのが「史料学」である。史料の証拠物件としての信憑性・適切性を、内的・外的批判を通じて究明する「史料批判」の作業と並んで、歴史研究のもっとも基礎的な部分を形成する。何が史料となりうるかは歴史家が如何なる問いを発するかによって決まるのであり、問いに先立って既成の史料が存在するのではない」（二宮宏之、1985）。

歴史研究と史料の関係は歴史学の発生以来のものであり、史料学も歴史学の発生とともに興ったといえるだろうが、近年「史料学」ということが

あらためて問題となってきているのは、史料というものについての認識の変化による。従来の文字史料中心の歴史研究の方法論の中では、その史料学にあたるものとして、古文書学・古記録学・書誌学などがそれぞれの役目を果たし、それ自体の蓄積を行ってきたわけだが、文字以外の史料が考えられるようになると、それに応じた史料学が求められるのは必然的のことであろう。文字を持たない社会はもちろん、人間社会の中には文字によって記録されない部分も多い。近年、歴史認識の方法が、政治や制度など記録に残されやすいものだけでなく、これらを取りまく多様な文化現象や、民衆の生活、人間の心性等を重視する方向へと変わってきていることもあって、文字以外の史料の役割が改めて見直されている。

石井（1976）は文献史料以外については、遺跡・遺物等の史料にかかわる考古学や、風俗・習慣・伝説・民話などとして伝承されてきた民俗史料にかかわる民俗学などが、それぞれの史料学としてすでに独立の学問的分野を形成しているとし、地図類についても史料学にとりこむことの必要にわづかながら言及している。

図像・音声・地図等、実際の研究の場面ではそれぞれの方法論のもとに活用されてきてはいるはずであるが、それらを集約し一般化してひとつの体系とする努力が望まれ、また次第に動き始めているというのが現状であると思われる。

こうして歴史学一般のなかにも「地図史料学」への機運が胚胎しているのが看取できるが、地図は歴史学一般の史料であると同時に地図史の史料でもある。地図学には地図史が欠かせぬ分野であるとともに、地図の特質の認識とその認識に立脚した史料論の展開は、地図学にしてはじめて可能であるわけで、「地図史料学」が地図学の中で育まれることは当然のことであろうし、そのようにして成立した「地図史料学」は一般の歴史研究にも資するところがあるだろう。同時に歴史学一般の中での史料学のあり方から学ぶべきことも多いはずである。歴史研究の中に「史料学」をどう位置づけるかについては、深谷（1982）が参考になる。すなわち、（痕跡「史料」だけを残して過ぎ去ってしまった）歴史的現実を研究し、その正しい認識に近づくには、（正しい手段によらねばならず）従ってその「手段」自体の研究が必要であ

るとし、「手段」として、理論の研究（概念や時代区分・歴史法則あるいは歴史展開の傾向などについての抽象度の高い考察）、研究史の研究（主として歴史事象に対する見解の中身そのものを検討する学説史と、研究の課題意識のあり方を検討する史学史）、また研究動向の反省や方向づけと対置して、史料の研究をあげる。そして、現在「史料学」として歴史学がその内部で自覚化しようとしているものは、歴史認識を進める上での史料に関する諸問題を、新たな視点で系統的に独自に対象化して行こうとするものであるだろうとしている。

地図に関する「史料学」についても、現実にはこれにあたるものが地図史研究と相携えて蓄積されてきている筈であり、対象の多様化や見直しの潮流の中で、新たな自覚化がもためられているということであろう。

地図は一般には自然、人文景観の記録と考えられているが、同時にそれらを作り出した社会や作成者の、地域（世界・国なども）についての認識をも内包しており、各時代・社会との関係でその「言語」や「文法」を理解することによって、景観の復元以上の可能性が期待できる（Harley, 1989）。前述した葛川絵図研究の事例などもこういった観点を反映したものといえよう。小川都弘（1992）は、中世荘園絵図の解読の例を挙げて、その分析の枠組み・方法論と荘園絵図の史料学を考察し、あわせて日本における地図研究の動向をも概観している。地図の即物的な読みとりにとどまらず、社会的・文化的文脈の中で、当時の人々の空間認識等を読み解いていく可能性は魅力的ではあるが、いわゆる実証性には乏しい面もあることは心せねばなるまい。Harleyも上の文献で過去・現在を通じて地図の読みは相対的なもので、絶対の解はないことを指摘している。

地図史料学のヒントとなる文献としてもう一つ高橋（1986）もある。ここでは、地図に関する総合の学としての「カルトロロジー」を想定し、地図の本質論を扱う「共時的カルトロロジー」と、歴史的な部分を扱う「通時的カルトロロジー」（地図史とイコールではないとするが、科学技術史的な地図史でないという意味と見える）の二つの体系をその構成要素とした上で、それらの方法、地図の解読の視点、共時的・通時的の地図分類などにふ

れている。

地図自体の史料性についての検討は地図史料学にとっても大きなテーマの一つとなるだろう。

## 6. 地図史料学へ

地図史料学という枠組み全体の構造となすべき作業については、ひきつづき衆知を集めて行かなければならないが、現段階での地図史料学の課題と考えられるものをいくつか挙げておこう。

これまでにふれてきたとおり、対象となる地図についての見方は不変ではない。いかなる素材が史料となりうるかを判断し、その性格を明らかにしていく基礎として、地図学・地図史の理論・方法論をより深めること、研究の現況を把握しておくことがまず第一の要件であり、本稿でも、前半でその一端にふれてきたが、実際に当面手を下すこととして考えられることは、たいして目新しいものではないようである。

### ①史料としての地図の調査・分析手法の追究と標準化

理論面とも相通じるものであり、前掲「カルトロロジー」などもその一例と見られる。これまでの地図史研究の事例をもとにした一般化への方法を探ること。

### ②地図の所在情報の整備

いかなる方法論があろうと、素材となる原史料にふれなくては何もできない。今後ますます増加するであろう地図自体の研究にはこれまで以上に、多数の図の比較研究が必要となるだろう。

各収蔵施設の所蔵目録の完備はもちろん、一地域・国などについての各機関所蔵資料を網羅する総合目録、テーマ別・タイプ別などさまざまなジャンルに関する一般的リストから精密な書誌まで、研究者や学会・収蔵機関等の努力で多くの成果がすでにあがっているが、もちろんなお不足は多い。データベース構築への努力も各所で行われており、この面での可能性は大きい。

### ③史料の整理・組織化

目録や分類などの観点の検討、地図の記載方法の標準化など。

### ④文献目録の整備（学際的目配り）



関連文献が散在していることは前にもふれたとおりで、地図史として、あるいはその中の何かの分野にしばった文献目録・データベース等の整備。

#### ⑤史料収集のポリシー確立

関連機関の分担による効率的な収集や相互利用のネットワークも含む。

現代の地図も将来の日から見れば史料となるものであり、これらを後世に伝えるためには、現代の地図(情報)に関する収集のポリシー確立も必要である。

これらの課題はいずれも、地図図書館や学会、また研究者たちの手で従来から行われてきていることではあるが、より統合的な構想のもとに充実させていく努力が必要であろう。

欧米に比して遅れの見える日本でも、最近は多くの地図収蔵機関がその目録の刊行や展示会によって、所蔵資料へのアクセスをはかっているし、地形図図歴調査(日本国際地図学会地図史部会、継続中)・地籍図所在調査(日本地理学会地籍図委員会)・博物館収蔵古地図の数量調査(地図情報センター、未公開)・県史編纂過程での関係古地図の悉皆調査(福井県)等々、多彩な成果が上がるるとともに、古地図の復刻出版も広く行われて古地図利用の条件は整備されつつある。

地図学や地図史の研究のこれまでの蓄積の上に立つ現代の地図史研究が、単なる過去の痕跡としての地図にとどまらず、地図本来の機能を実現するための諸活動や、地図と社会のかかわりなども含めた広い展望をもつに至っていることは第2・3章等で見たとおりである。関心の展開にともなって、従来の地図学や地図史ではとりあげられることの少なかった各種の地図や、これらも含めた地図の残存状況そのものが問題になるなど、史料学の確立への潜在的要請も認められ、地図史料学の条件は内からも外からも熟しつつあるといえるだろう。地味で根気のいる仕事を中心となるだろうが、具体的な仕事を通じて、「地図史料学」も確かなものになるだろう。

本稿は昨春の本学会平成5年度大会での演題を基礎にまとめたものである。浅学非才の身にはいささか大き過ぎるテーマでいささか粗雑の上、整理不十分、意をつくせぬ部分も多々あるが、もと

より素描のつもりであり、実践面はもちろん、理論的にもさらに時間をかけて補強して行きたいものと考えている。また、ここでは現在の情報処理技術に伴う諸問題について全くふれていないが、電子情報と史料伝承の問題は史料学にとって大きな課題であることを付記しておきたい。

#### 注

- 1) 予稿集に代わるものとして、*Libellus*. 7 (1992) がある。
- 2) Harley, J. B. and Woodward, D. (1987): Preface. Harley, J. B. and Woodward, D. (eds). "The History of Cartography. vol. 1" Univ. of Chicago Press. Chicago. xvi.  
地図・地図学・地図史等の従来の概念の検討とあわせて提示されている本書編者の地図の定義
- 3) Peutinger, Konrad (1455-1547)  
アウグスブルグの人文学者、収集した地図の大部分はババリア州立図書館所蔵。
- 4) Richard, Gough (1735-1809)  
イギリスの好古家、国の地誌的過去の保存に努める。史料保存と利用のための図書館の意義にも言及している。
- 5) Santarem, Manuel Francisco de Barros e Sousa, Viscount of (1791-1865)  
"Atlas compose de mappemondes, de portlans... depuis le VI jusqu' au XVII siecle (Paris, 1842-53)"
- 6) Jomard, Edme-Francois (1777-1862)  
フランスの地理学者。ナポレオンのエジプト探検に同行、フランス地理学協会設立に尽力し、1848より会長、1828よりパリの王立図書館(現在の国立図書館)地図室長。
- 7) 全4巻(予定)中、既刊2巻  
Detombes, M. (ed) (1964): "Mappemondes, A. D. 1200-1500" N. Israel. Amsterdam.  
Campbell, T. (1987): "The Earliest Printed Maps" The British Library. London.
- 8) Bagrow, Leo (1881-1957) (Bagrov, Lev Semenovich)  
ロシア海軍水路部を経て、1918よりベルリン、1945以降ストックホルム在住。地図史とその史料探索について、影響力多大。

- Obituary by R. A. Skelton "Leo Bagrow, Historian of Cartography and Founder of *Imago Mundi*, 1881-1957" *Imago Mundi*. 14 (1959) 4-12. etc.
- 9) Eckert (-Greifendorff), Max (1868-1938)  
ドイツの地理・地図学者, F. Ratzelのもとで地理・歴史・民族学等を学び, のちアーヘン工科大学教授, 地図についての科学的探究に先鞭をつける。  
"Die Kartenwissenschaft: Forschungen und Grundlagen zu einer Kartographie als Wissenschaft" 2 vols Walter de Gruyter. Berlin. 1921-25. etc.
- 10) International Conference on the History of Cartography
- 11) Harvey, P. D. A. (1980): "The History of topographical Maps; Symbols, Pictures and Surveys" Thames and Hudson. London.
- 12) 文献におけるbibliographyから作られた用語。単なる目録にとどまらず, それぞれの地図について, 作成・由来, とくに伝写・異版の推移等が明らかになるような詳細で分析的な記載を行うもの(Harley. 1987. p21)
- 13) Robinson, R. H. and Wallis, H. (eds)(1987): "Cartographic Innovations; An International Handbook of Mapping Terms to 1900"
- 14) カルトグラファーに関する人名辞典作成のための参考書目作成, 地図の年表的データベース作成等 (Wallis.1989. p116)
- 15) 『在土古図』(題額: 武州豊島郡江戸庄図) 須原屋茂兵衛・近江屋興兵衛・越後屋長三郎 1811 (文化〔8〕辛未) など
- 16) 葛川絵図研究会 (1982): 「葛川絵図」に見る空間認識とその表現. 日本史研究244. 同 (1984): 絵図を読む1~6. 地理. 29巻1~5, 7号. ほか
62.  
金窪敏知 (1991): 『現代理論地図学の発達』大明堂.  
川村博忠 (1992): 長谷川孝治: 地図史研究の現在—1980年代の英米の動向を中心に— (筆者注: 学会特別報告の要約), 人文地理, 44-1, 103-107.  
千田稔 (1980): 地理的「場」の始原性を求めて—記号論的アプローチ, 人文地理, 32-1, 47-62.  
高橋正 (1986): カルトロジーの方法論に関する覚書. 『人文地理学の視園』 大明堂. 99-109.  
二宮宏之 (1985): 史料学. 『大百科事典』 平凡社.  
長谷川孝治 (1991): 地図史研究の新たな地平に向けて. *Libellus*, No. 7. 7-12.  
久武哲也 (1982): 岩絵と砂絵の地図学. 『地理の思想』 地人書房, 15-31.  
———— (1979): 岩絵地図と砂絵地図—アメリカ原住民の空間認識とその土着的表現様式. 甲南大学紀要文学編, 32, 37-99.  
深谷克己 (1982): 歴史史料と歴史認識. 『現代歴史学の成果と課題Ⅱ 1 歴史学と歴史意識』 青木書店.  
藤田元春 (1942): 『改定増補日本地理学史』 刀江書院. (原書房より復刻, 1982)  
矢守一彦 (1974): 『都市図の歴史; 日本編』 講談社. 82-88  
———— (1975): 城下絵図史研究. 朝日新聞. 1975. 12. (夕刊)  
Blakemore, M. and J. B. Harley (1980): Concepts in the History of Cartography; A Review and Perspective. *Cartographica*. Monograph, 26 (25-4).  
Harley, J. B. (1987): The Map and Development of the History of Cartography. In Harley, J. B. and D. Woodward (eds). "The History of Cartography" Univ. of Chicago Press. Chicago. 1-39.  
———— (1989): Ancient Maps Waiting to be Read. *Geographical Magazine*. 53. 313-317.  
———— and D. Woodward (eds)(1987): "The History of Cartography" Univ. of Chicago Press. Chicago.  
Skelton, R. A. (1972): "Maps; A Historical Survey of Their Study and Collecting" Univ. of Chicago Press, Chicago.  
Wallis, H. (1989): Historical Cartography. Rhind, D. W. and Taylor, D. R. F. (eds). "Cartography; Past,

## 文献

- 石井進 (1976): 「史料論」まえがき. 『岩波講座 日本歴史25 別巻2』.  
海野一隆 (1993): 古地図研究の過去・現在・未来—独断と偏見をまじえて随筆風に. 月刊古地図研究. No.281 (24巻5号), 2-11.  
小川都弘 (1992): 中世荘園絵図のソシオ・カルトロジー—その方法と実践—. 人文地理, 44-5, 42-

Present and Future” ICA (Elsevier), 111–122.

An Outline of the “Historical Documentation” of Cartographic Materials  
Junko SUZUKI